

現代神学 第12回  
オンデマンド動画 第6回

# エコロジーの神学 動物の神学

小原 克博

1

## Overview

1. エコロジーの神学の前史——キリスト教に対する批判
2. エコロジーの神学の形成——批判に対する応答
3. 地球環境問題はなぜ大事なのか——聖書から
4. 食とエネルギーをめぐる問題
5. 動物の神学
6. 今回の課題

2

1

## エコロジーの神学の前史 ——キリスト教に対する批判——

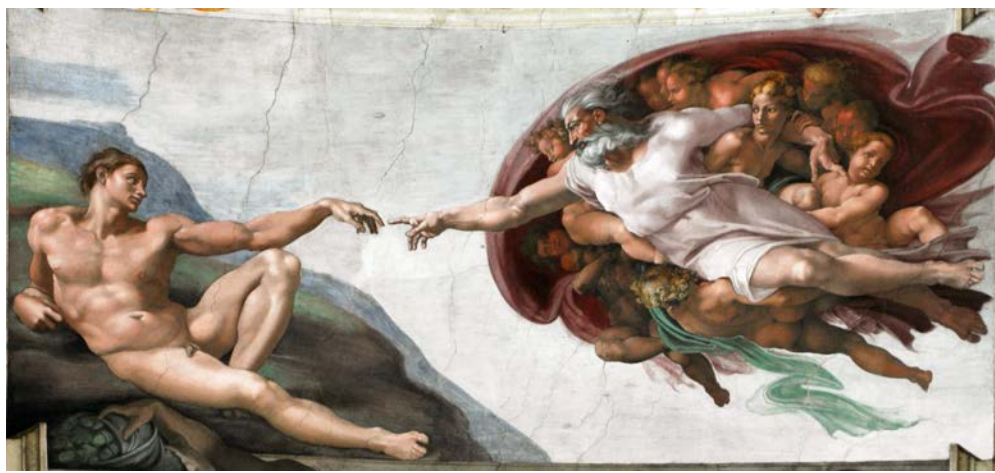
3

## キリスト教の生態学的責任

- ・ リン・ホワイト論争：1967年、*Science* 誌に掲載された下記論文がきっかけ
- ・ リン・ホワイト・ジュニア「今日の生態学的危機の歴史的源泉」（『機械と神——生態学的危機の歴史的根源』みすず書房、1999年、所収）
- ・ 生態学的危機の原因は、キリスト教の人間観・世界観にあると指摘した。

4

## リン・ホワイトの主張



5

## リン・ホワイトの主張

「物理的創造のうちのどの一項目をとっても、それは人間のために仕えるという以外の目的をもってはいない。そして人間の身体は粘土から作られたけれども、人間は単なる自然の一部ではない。人間は**神の像**を象って作られているのである」。

→ 創世記 1:27-28

6

## 創世記 1:27-28

神は御自分にかたどって人を創造された。**神にかたどって**創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて**支配せよ**。」

神の像 (Imago Dei) とは？

【参考】小原克博「『神の像』に関する一考察——フェミニズムとエコロジーへの応答」、『日本の神学』第37号、1998年、33-54頁。

7

## リン・ホワイトの主張

・ 「キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知っているなかでもっとも**人間中心的**な宗教である。……キリスト教は古代の異教やアジアの宗教（おそらくゾロアスター教は別として）とまったく正反対に、**人と自然の二元論**をうちたてただけではなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのであった」。

・ 「自然は、人間に仕える以外になんらの存在理由もないというキリスト教の公理が斥けられるまで、生態学上の危機はいっそう深められつづけるであろう」。

8

## リン・ホワイトの主張

・「西欧の歴史上の最大の精神革命、聖フランチェスコは、かれが自然および自然と人間との関係についてのもう一つ別のキリスト教的見解と考えたものを提案した。かれは人間が無際限に被造物を支配するという考えにかえて、人間をも含むすべての被造物の平等性という考えをおこうと試みた。（中略）初期フランシスコ会士の、自然のすべての部分の精神的自立性にたいする深く宗教的な、しかし異端的な感覚が、一つの方向を指しているかもしれない。わたくしはフランチェスコを**生態学者の聖者**におしたい。」

9



「小鳥への説教」  
(ジョット、1305年頃)

10

## 回勅『ラウダート・シ』 (Laudato Si')

教皇フランシスコは2015年6月18日、「**エコロジカルな回心** (ecological conversion) を呼びかける回勅『ラウダート・シ』を発表した。



わたしたちに何ができるか、何をすべきかとの問いに対し、社会・経済・政治のあらゆるレベルにおける誠実で透明性のある対話を提案。いかなるプロジェクトも、それが責任ある**良心**によって生かされていないならば、決して効果的ではあり得ないと指摘する。(5章)

11

# 2

## エコロジーの神学の形成 — 批判に対する応答 —

12

## 環境問題に対するキリスト教の応答

1. 神の信託管理人思想の展開
2. 自然理解の再解釈
3. 基本概念の拡張
4. フェミニスト神学からの問題提起

13

## 1. 神の信託管理人思想の展開

- ・ ジョン・パスモアは『自然に対する人間の責任』（1974年）の中で、キリスト教の伝統の中には、自然の支配者としての人間のイメージばかりでなく、自然の steward としての伝統もあることを示し、「スチュワード精神」（stewardship）の概念を導入した。
- ・ これ以降、キリスト教における議論では、**steward/stewardship** が人間の自然界に対する役割を示すものとして頻繁に使われるようになった。

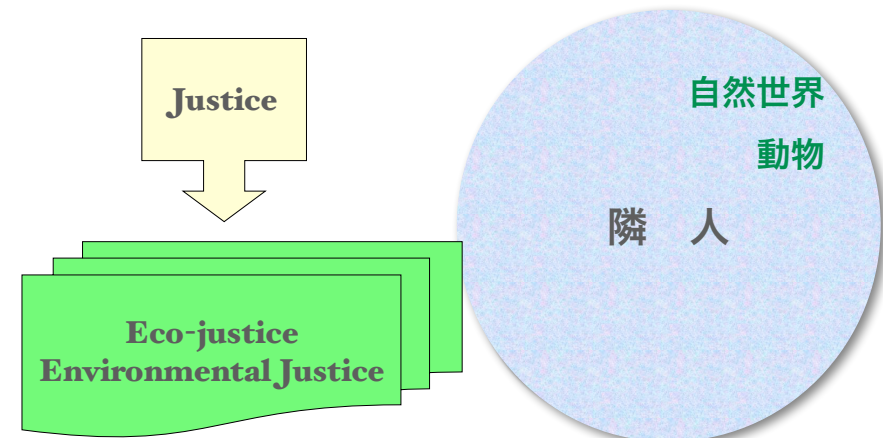
14

## 2. 自然理解の再解釈

- ・ ゲルハルト・リートケ（旧約聖書学）ら聖書学者は、エコロジーの視点から聖書を解釈し直した（『生態学的破局とキリスト教——魚の腹の中で』新教出版社、1989年〔原著1979年〕）。
- ・ 自然と人間の関係を問う際に、創世記の冒頭（創造物語）だけに注目するのではなく、他の箇所（詩編、ヨブ記、箴言など）にある**自然描写の多様性**に目を向けさせた。

15

## 3. 基本概念の拡張



16

## 4. フェミニスト神学からの問題提起

- ・ エコ・フェミニズム
- ・ 人間による自然支配と、男性による女性支配の間にアナロジー（類比関係）を見出す。
- ・ 黙示文学的終末論（「ヨハネ黙示録」の最後の審判など）への批判
- ・ 現在の自然環境は破棄され、新しい天地が到来するという考え方は反エコロジカルではないか。

17

# 3

## 地球環境問題はなぜ大事なのか — 聖書から —

18

## 天地創造——宇宙・地球・生命の誕生

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、**良しとされた**。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。（旧約聖書「創世記」1章1-5節）

19

## 創造と安息

第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、**安息**なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、**安息**なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。

（創世記2:2-3）

20

## 大地の安息

イスラエルの人々に告げてこう言いなさい。あなたたちがわたしの与える土地に入ったならば、**主のための安息をその土地にも与えなさい**。六年の間は畑に種を蒔き、ぶどう畑の手入れをし、収穫することができるが、七年目には全き安息を土地に与えねばならない。これは主のための安息である。畑に種を蒔いてはならない。ぶどう畑の手入れをしてはならない。（レビ記25:1）

21



渡辺禎雄

22

- ・わたしは、**あなたたち**と、そして**後に続く子孫**と、契約を立てる。あなたたちと共にいる**すべての生き物**、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。（創世記9:9-10）
- ・更に神は言われた。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これは**わたしと大地の間に立てた契約**のしるしとなる」。（創世記9:12-13）

23

# 4

## 食とエネルギーをめぐる問題

24

## なぜ食やエネルギーが必要か？

- ・ エントロピー増大の法則（熱力学の第二法則）
- ・ 放っておけば、エントロピー（乱雑さの程度）は大きくなっていく。
- ・ 生物も例外ではない。食物の形で低エントロピーの物質を体内に取り込み、高エントロピーの老廃物を排出することによって、身体内のエントロピー状態（ホメオスタシス）を維持している。分解と合成の流れを維持。
- ・ 環境問題のすべては、人間のエネルギー消費と関係している。

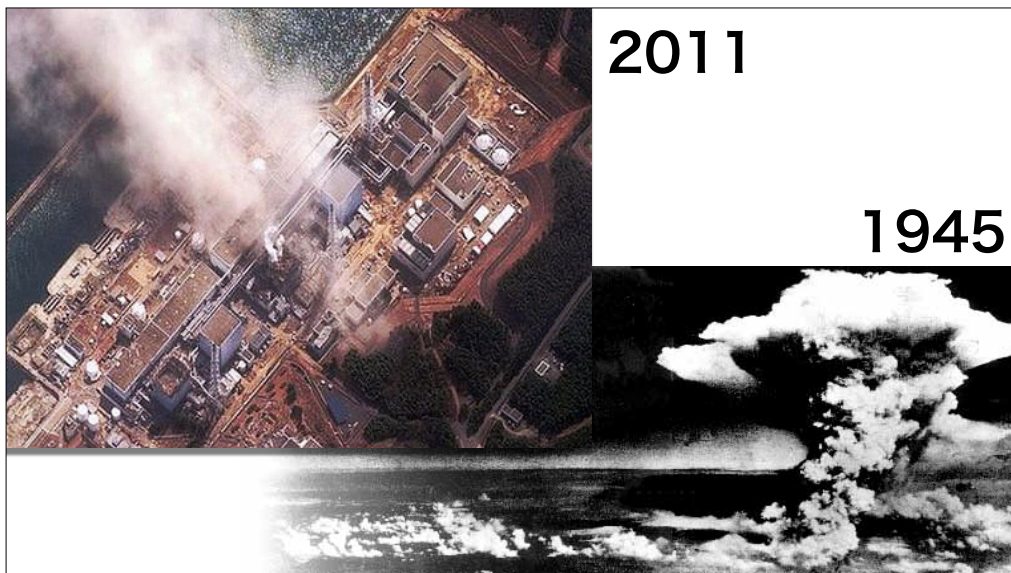
25

「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」（創世記2:16-17）

「その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。」（創世記3:6）



26



27

## ドイツの決断

- ・ エネルギーの安全供給に関する倫理委員会（2011年4月に作業を開始）
- ・ 報告書（5月30日）「**キリスト教の伝統**と**ヨーロッパ文化の特性**に基づき、我々は自然環境を自分の目的のために破壊せず、**将来の世代**のために保護するという特別な義務と責任を持っている」
- ・ 6月6日、原発の全廃（2022年までに）を閣議決定



28



29



30

## 食の倫理

- ・ グローバル・フードシステム
  - ・ 「食の倫理」がなければ、食糧消費に関して、よい選択することができない。
- ・ 人類全体を養う十分な食糧があるが、8億4200万人が慢性的な栄養不足状態。
- ・ 集中家畜飼育施設（CAFO）の自然環境に対する影響

31



32



## 【参考文献】

- ・ リン・ホワイト『機械と神——生態学的危機の歴史的源泉』みすず書房、1999年。
- ・ ジョン・パスモア『自然に対する人間の責任』（特装版）岩波書店、1998年。
- ・ ゲルハルト・リートケ『生態学的破局とキリスト教——魚の腹の中で』新教出版社、1989年。
- ・ ユルゲン・モルトマン『創造における神——生態論的創造論』新教出版社、1991年。
- ・ 富坂キリスト教センター『エコロジーとキリスト教』新教出版社、1993年。
- ・ 笠井恵二『自然世界とキリスト教』新教出版社、1999年。
- ・ ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利——環境倫理の文明史』筑摩書房、1999年。

33

## 【参考文献】

- ・ 小原克博「キリスト教は環境問題に対して何ができるのか?」、『福音と世界』2008年1月号、12-16頁。  
<http://www.kohara.ac/research/2007/12/article200712a.html>
- ・ 小原克博「不在者の倫理——科学技術に対する宗教倫理的批判のために」、『宗教と倫理』第16号、2016年、3-17頁。  
<http://www.kohara.ac/research/2017/01/Ethics-of-the-Absent.html>
- ・ 小原克博「エネルギー問題をめぐる倫理的課題と宗教——持続可能な社会のための指針としての「不在者の倫理」」、『電気評論』第660号（第103巻第12号）、2019年、10-15頁。  
<http://www.kohara.ac/research/2019/02/07.html>

34



35

## 動物と宗教—媒介としての動物

- ・ 超越的なもの（世界）と人間をつなぐ媒介としての動物（穀物）
- ・ 人類史的な尺度から見ると、動物供犠を中心とする犠牲の祭儀（供犠）が「宗教」そのものであった。
- ・ 日本、中国、朝鮮半島に事例について、原田信男『神と肉——日本の動物供犠』（平凡社、2014年）を参照。

36

## 供犠の文化

- 犠牲獣 (victim) の破壊を通じて神が顕在化。
- 殺す文化
- 神と人の非連続性
- 一神教文化

## 供養の文化

- 神 (々) との共食 (動物・穀物) を通じて神が顕在化。
- 食べる文化
- 神と人の連続性
- 多神教文化

【参考】中村生雄『祭祀と供犠——日本人の自然観・動物観』法蔵館、2001年

37

## 宗教学の人間理解と近年の探求

- 西欧の宗教学では、人間と動物を分けるものとして「宗教」を規定した (デュルケーム、エリアーデ等) 。
- 宗教の起源：「動物性」の終わり
- 近年における人間の起源の探求：**人間と動物の連続性**の発見
- 遺伝学、霊長類学、考古学、社会人類学、進化生物学などを通じて

38

## 「動物の神学」の前史

- 動物の「魂」や「権利」をめぐる議論の蓄積 【理論】
- 西洋キリスト教では、伝統的に魂は人間の専有物として考えられてきた。
- 動物の「魂」をめぐる議論の歴史は長い。
  - 池上俊一『動物裁判』（講談社現代新書）1990年。
  - 金森 修『動物に魂はあるのか』（中公新書）2012年。
- 動物のための礼拝（1970年代以降） 【実践】

39

## 聖書的動物観の一例

人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊を持っているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、すべてはひとつのところに行く。すべては塵から成った。すべては塵に返る。人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。

(コヘレトの言葉 3:19-21)

40

## 東方キリスト教における理解

ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（原著1880年）におけるゾシマ長老の言葉：

「兄弟よ、人々の罪過を恐るる勿れ。罪過のただ中にある人間を愛せよ。なぜなれば、これはすでに神の愛にあやかかるものであって、地上における愛の頂上にほかならぬからである。ありとあらゆる神の創造物を、全体としても、はたまた各部分としても、なべて等しく愛するがよい。一枚の木の葉、一条の日の光をも、もれなく愛するがよい。**動物を愛せよ**。植物を愛せよ。ありとあらゆる物象を愛せよ。一切の事物に愛をそそぐならば、そこに神の秘密を発見するにいたる。（続く）

41

而して、ひとたびこれが発見したからには、もはやその後は毎日、毎時、毎分、いよいよますます、たえずその認識を深めるようになるであろう。かくてついに、完全無欠な、全世界全人類的な愛によって、この世を光被するにいたる。**動物を愛せよ**。かれらには神が思想の源と、平安なる喜悦とを与え給うたのである。かれらを憤激に駆り立てる勿れ。**苦しめてはならぬ**。かれらから喜悦をうばいとはいけない。神の心に抗してはならぬ。人間は動物の上に立って、傲然と構えるべきものではない。かれらはすべて罪過なき存在であるが、これに反してわれわれ人間は、偉大な稟体を具備しつつも、おのが出現によって大地を腐敗させ、その腐爛せる足跡を、あとにのこしてゆくのである。ああ、嘆かわしいかな！ われわれはほとんど各人みな然りである！」

42

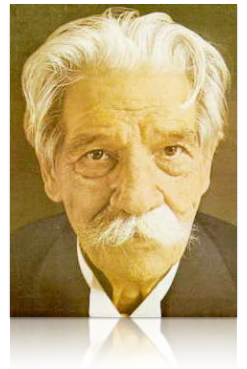
## 動物愛護運動の先駆者たち

- 1824年、アーサー・ブルーム Arthur Broome（英国国教会の司祭）らが王立動物虐待防止協会（The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals）を設立。キリスト教の慈愛の精神が、動物にまで拡充されることを願った。
- 1915年、日本人道会の設立。メアリー夫人（新渡戸稲造の妻）らが中心になった動物愛護運動の先駆。後に戦争により活力を失っていった。

43

## Albert Schweizer（1875-1965）

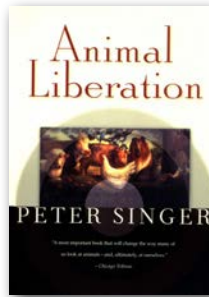
- 生への畏敬の倫理（ethics of reverence for life）  
「私は、生きんとする生命にとりかこまれた生きんとする生命である」という事実（『文化と倫理』（著作集第七巻）311頁）  
The most immediate fact of man's consciousness is the assertion "I am life that wills to live in the midst of life that wills to live."  
● 生命中心主義（biocentrism）の先駆者的役割を果たす。



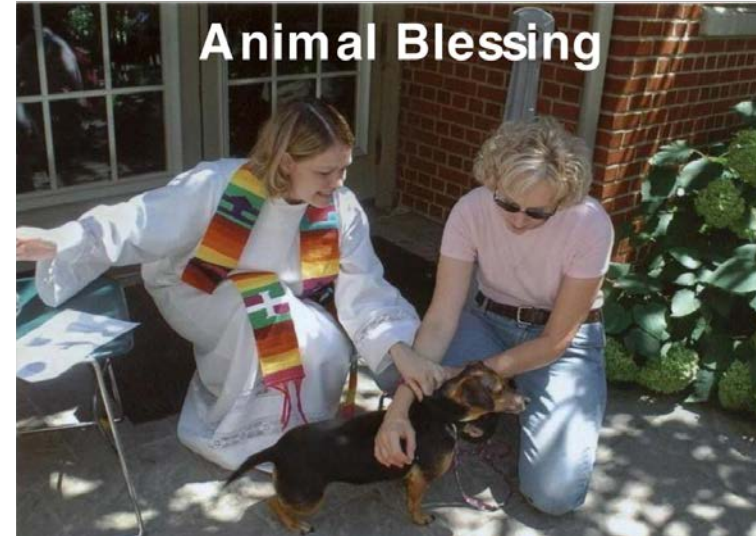
44

## Peter Singer (1946-)

- 『動物の解放』 *Animal Liberation*, 1975
- 功利主義（最大多数の最大幸福）の視点から「種差別」 (**speciesism**) を批判。
- 人間以外の感覚的存在者 (sentient being) も最大多数の中に算定される資格を持つと考える。**感覚性** (**sentientcy**) を有する限り、人間であれ動物であれ、平等な道徳的配慮がなされるべきであると主張する。動物実験の批判。肉食主義のすすめ。
- ユダヤ・キリスト教の人間中心的な考え方を批判。



45



46

## 動物の神学の論点

「私が示唆したいのは、**権利の概念**は道徳神学と十分に両立するものであり、それは動物をも含むように正しく拡張されるのが正しいということである。同時に私は、権利の言語は動物に関する神学的視点から述べられる全てのことを網羅するというような考えに抵抗する。私の考えでは、動物の価値を尊敬し、神に与えられた動物たちの権利に責任をもち、それらを認める正当な理由が存在するのだ。」 (A.リンゼイ『神は何のために動物を造ったのか——動物の権利の神学』教文館、2001年、20頁)

47

「**苦しみ**が人間以外の世界に存在するという認識は、これらの領域のための贖いの問題と取り組むことをも要求する。(中略)なぜなら、問題はどの位、あるいはどの程度あらゆる存在が苦しむのかということではなく、どの存在も苦しむということであり、そのことが取り組まねばならない基底の問題なのである。もしボンヘッフアーがかつて言ったように「**苦しむ神だけが助けることができる**」のならば、次のような結論になる。苦しみのあるところではどこでも——苦しみの種類と程度がどんなものであろうとも——神もまた苦しむのである。」 (同書、105頁)

48

「我々が動物にたいして義務をもっているという道徳的には満足すべき解釈は、ある動物解放主義者によって勧められているような、動物をも同等に考えるべきであるという主張に単に留まってはられないのである。イエスの人格によって示されている神的愛という考えに基づいて私は次のように提案する。すなわち、弱者と無防備なものは同等なのではなく、より大きな考慮を与えられるべきである、と。**弱者が道徳的優先権を持つべきなのである**」（同書、64頁）。

49

## まとめ

- 人間を特権化する近代的「宗教」概念の再考
- 文化ナショナリズムに陥らない動物観・生命観の総合
  - 動物の権利（西洋）
  - 生命の連続性（日本）
- 人間の「動物性」（身体性）を自覚した人間観・歴史観の形成
- 食の倫理の構築

50

## 6 今回の課題（600～800字）

1. 以下のリーディング・アサインメントを読んでください。
  - ・ 小原克博「環境問題に対して宗教が果たす役割——『ラウダート・シ』を手がかりとして」、『福音宣教』2018年4月号、20-26頁。
  - ・ 小原克博「動物と人間をめぐる倫理的課題——日本における動物観を中心に」、*Dharma World*, Vol. 44, p. 6-8（原文英語）。
2. 上記の内容と今回の講義の中で、あなたの印象に残った（重要であると思った）点（複数可）を、その理由と共に述べてください。

51